

令和 5 年 4 月 23 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01652

研究課題名（和文）多声的保育評価の開発：子どもと保護者の声を評価に導入する方法の提案

研究課題名（英文）Development of multi-vocal assessment in early childhood education and care

研究代表者

松井 剛太（MATSUI, GOTA）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：50432703

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,200,000円

研究成果の概要（和文）：子どもにとって良い保育とは何か。本研究では、子どもの声を聴く保育アセスメントの理論と方法を検討した。研究の主な成果は次の3点である。第1に、子どもの声は言葉以外のサインも含み、保育者との関係の下で具体化することを明らかにした。第2に、子どもの声を受けとる上で、可視化する方法をいくつか提案した。第3に、子どもの権利の行使、保育における探究、保育者とともに保育を創造する、といった側面から、子どももアセスメントの主体となることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、子どもの育ちを大人が一方的な基準によって評価するのではなく、子どもが大切にしている価値観などを踏まえて、子どもと対話的に評価する方法論を提示した。したがって、学術的意義としては、従来の評価観に基づく方法論のオルタナティブを提示し、学習者主体のアセスメント方法を提案した点が挙げられる。また、社会的意義については、子どもまんなか社会を目指す中で、子どもの声を世の中に反映する上で、乳幼児の声が言葉に限らず、その他のサインにも含まれることを示し、それを受け取る大人の構えについて考察したことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：What is the high quality for children in early childhood education and care (ECEC) settings? This study examined the theories and methods of ECEC assessment through listening to young children's voices. The three main findings of the study are as follows. First, it was founded that children's voices include non-verbal signs and materialise in relation to the ECEC teacher. Second, the study proposed several methods of visualisation in the reception of children's voices. Third, we showed that the children have agency to assess their experience in terms of exercising the child's rights, exploring in environment of facilities based on their own curiosities and interests and creating play activities together with the ECEC teacher.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：保育の質 子ども声 アセスメント アクションリサーチ 就学前施設

### 1. 研究開始当初の背景

乳幼児期の保育の質が、子どもの将来的な生活の質に影響を及ぼすことが示されたことで、「保育の質をどのように評価するのか」の議論が世界各国で活発に行われている。そして、保育の質をどう捉えるかについては、大別して二つの立場がある。第1に、保育の質を客観的で普遍的なものとして考える立場である。これは、良い保育の評価基準を策定し、各保育現場の保育がその要件を満たしているかどうかをチェックすることで評定する。第2に、保育の質を多様で、主観的で、多視点からとらえられるものとして考える立場である。これは、良い保育というのを一義的に定めることを批判し、各保育現場の文化や特性などを含めた上で、当事者である子ども、保護者、保育者、地域の人々などの対話を通じて、実践を評価する。

後者については、北欧や中欧の国々を中心に、保育の受給者である保護者や子どもも保育評価の参画者とするを前提として、声を聴き、対話するための方法論が検討されている。たとえば、イタリアのレージョエミアではドキュメンテーションという記録により保育を可視化し、保護者に子どもの育ちを伝えると同時に保護者の声も聴き対話を深める方法が知られている。また、ニュージーランドでは、ラーニングストーリー(子どもの学びの物語)という保育評価により、保護者や子どもとの対話を通じて、経験の意味を探求している。

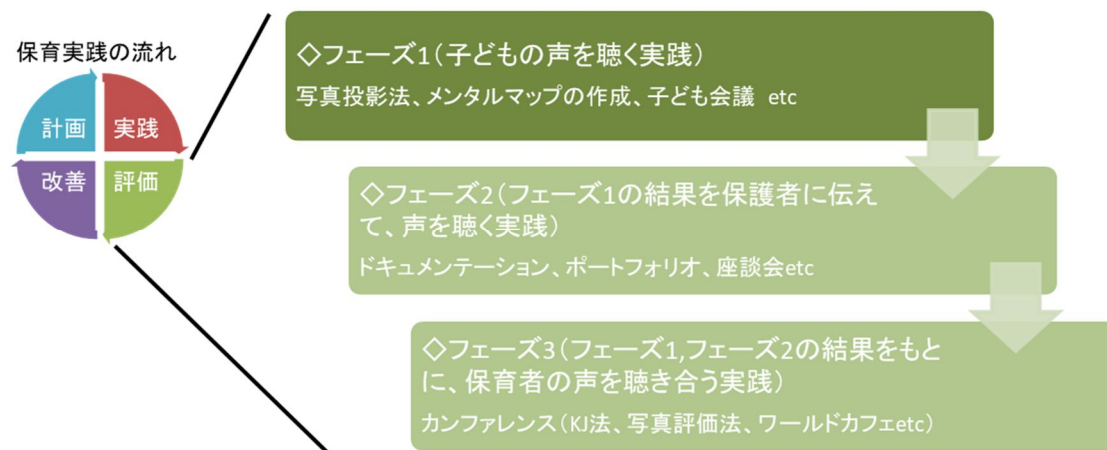
これらの取組は、日本でも実践されつつあるが、評価としての意義は十分に見いだせていない現状にある。そのため、保育を受ける子どもや保護者など当事者性を重視したうえで、当事者の声を聴き、対話をもとにした新しい保育評価(多声的保育評価)を試行・提案することで、従来の評価観の転換を迫ると共に、保育者がそれぞれの実践現場の特性を活かしながら保育の改善に資する「やりがいのある評価」を探究することが求められる。

### 2. 研究の目的

以上の背景と研究課題を踏まえ、本研究では、保育の質を多様で、主観的で、多視点からとらえられるものとする立場から、各保育現場において、保育の質の改善に資するための当事者の声を含めた新しい保育評価を試行・開発することを目的とする。

### 3. 研究の方法

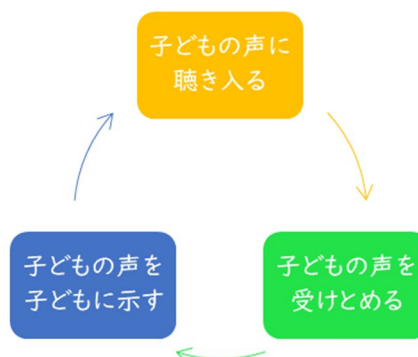
本研究では、4年の期間を設定し、国内10か所でのアクションリサーチに基づき、多声的保育評価の試行・改善に取り組んだ。各保育現場でアセスメントの見直しを行い、施設が変わるプロセスについて事例収集を行った。具体的には、以下のような手続きを参照に進めた。



### 4. 研究成果

第1に、アクションリサーチからこどもの声を聴く実践として、下記の循環モデルを提示した。

まず、保育者は「子どもの声に聴き入る」ことが求められる。これは、ただ子どもの声を聴けばよいというわけではない。ここには、保育者と子どもの立ち位置が関わってくる。たとえば、「声を聴く保育者 聴きとられる子ども」という関係性でいる場合、「保育者に自分の要望を叶えてもらおうとする子ども」が現れてくる。これは、保育者と子どもの関係が、「能動-受動」にあり、子どもたちが自ら主体となって、保育を変えていくという状



態にはなりにくい。また、こういった関係性だと、保育者は子どもの言葉に注意が向き、言葉以外のサインを見逃す場合がある。子どもの声とは、子どもが発する言葉のみを指すのではなく、子ども自身の興味・関心や要求と、それを相手とのやりとりを通じて表現する行為の総体であり、一人ひとりの子どもには違いがあることを前提に大人によって聴きとられることによって初めて具体化するものである（松本、2021）。そこで、「自他、内外、能動受動という区別を超えたいわば相互浸透的な場」（鷲田、2015）にするうえで、他者の声を異質さに気づく経験をすることの重要性を明らかにした。

ただし、それだけでは、子どもの声を受けとめることにはならないことも示唆された。子どもの声の異質さに気づき、その面白さを感じるためには、周辺状況まで考慮しなければならないことが示された。たとえば、保育者が多忙感を感じている時や、クラスの子もたちが落ち着かないときには、子どもの声に気づいてはいても、それをネガティブに受けとめることもわかった（Matsui, 2021b）。つまり、子どもの声を聴く実践は、保育者個人の感受性や専門性のみならず、勤務状況など保育施設の構造の質も問い直す必要があることが示唆された。

第2に、子どもの声を可視化する方法を提案したことである。日本の文脈における写真投影法、ドキュメンテーション、ラーニングストーリー、SICS などアクションリサーチを通して、どういった特徴の園でどういったアレンジを加えて実践をしたのか、変容のプロセスを分析することでアセスメントの本質を探究した。一例として、写真投影法について述べる。写真投影法とは、クラーク（Clark, A.）ら（2001）によって提唱されたモザイクアプローチの一種で、写真という媒体を通して、子どもの見方や感性を読み取る。具体的には、子どもがカメラを持って、自身の生活している施設で自分の好きな場所や遊び場の写真を撮影し、その写真を保育者と一緒に見ながら対話することで、子どもたちが生活環境に対してどのような思いを持っているのかを探るものである。この実践では、砂場の写真を撮影した男児の「水を運ぶのが好きだから」という理由を聴きとることで、保育者は水を運ぶこと自体を楽しむという感覚の子どももいるということに気づいたことが明らかになり、自身の価値観とは異なる子どもの存在を意識することに繋がった（Matsui, 2021a）。このように、子どもの声を意識する段階では、写真投影法のような方法が有用であることが示唆されたが、子どもの声が聴こえてくるような段階に移行したときには用いられなくなったことから、保育者の構えの変容によって、有用な方法論も変化することが示唆された。

第3に、子どもの声を聴くアセスメントを通して、子どもたちの保育活動への参入のあり方が揺れ動くことである。たとえば、子どもたちが自らの意見を保育者に述べるという行為を通して、子どもたちが意見表明権を行使する立場になることがある。また、そういった参入の仕方だけではなく、子どもたちがそれぞれの関心や興味に基づいて保育施設の環境に疑問をもち、自らの考えを伝えあいながら疑問に対する探究をすることもある。そして、従来であれば、保育者が計画して決めていた保育活動や行事を子どもたちとともに計画することで、生活を創造するような立ち位置になることもあり得る。このような参入のあり方が様々に存在することをアクションリサーチの事例を通して明らかにした。

本研究では、保育現場における評価観のオルタナティブを提示したことが大きな成果といえる。従来の評価は、「大人が評価の基準となるものさしを設けること」と「そのものさしのもとで子どもの能力の有無を測定すること」が常識であった。本研究における子どもの声を聴く実践は、従来の評価観とは異なり、「ものさし」を子どもとともに考えることと、子どもが望む経験ができる保育施設を子どもとともに創ることが可能であることを示唆した点が重要な成果である。こういった評価の提案は、次の点で今後の保育実践に影響を与えることが考えられる。

まず、従来の思考フレームに疑問を投げかけることである。現在、マネジメントの観点から、保育の見直しでは、PDCA サイクルが採用されることが多い。このPDCA サイクルは大人の思考の手順を示したフレームであり、子どもが入る余地は設けられていない。しかし、子どもの声を聴く実践では、大人の計画通りには進まないこともあれば、大人の評価軸とは違う価値を子どもが持っている場合もある。このように、従来の思考フレームとは異なる形で保育実践の見直しが必要とされることが考えられる。

次に、水平的多様性を促進することである。子どもの声を聴くという行為には、「一人ひとり異なる声（多声性）が尊重されている」ことが前提となる。本田（2020）は、日本において望ましいとされる人間像は、垂直的序列化と水平的画一化の組み合わせを特徴とするシステムによって広がりを見せたとして述べている。垂直的序列化とは、「相対的で一元的な能力に基づく選抜・選別・格づけ」を意味し、水平的画一化とは、「特定のふるまい方や考え方を全体に要請する圧力」を意味する。この垂直的序列化と水平的画一化が組み合わさると、「ものさし」を一つに絞り、それに子どもたちを同調させるという現象が起こり、異質な他者を尊重し、新しい発想や挑戦を受け入れ称賛するような柔軟性に逆行することが指摘されている。そして、これらのオルタナティブとして、互いに質的に異なるさまざまな存在が、顕著な優劣なく並存している状態である「水平的多様性」が主張されている（本田、2020）。子どもの声を聴く実践は、子どもの評価軸を多様にするという点で、水平的多様性を促進することが示唆される。

<引用文献>

・Clark, A., & Moss, P. (2001). Listening to young children: The mosaic approach. London: National Children's Bureau Enterprises.

- ・ 本田由紀 (2020) 教育は何を評価してきたのか. 岩波新書. p202-237.
- ・ Matsui, G.(2021b). Using a Photo Projective Method to Listen to Children's Perspectives About Improving Kindergarten Environments. International Journal of Early Childhood. 52, pp. 281-297.
- Matsui, G.(2021a). Reflection on the Professional Development of Early Childhood Education and Care Teachers in Japan Based on Children's Voices. International Journal of Early Childhood. 53, pp. 367-384.
- ・ 松本博雄 (2021) 0歳児の“声”を聴きとる:「発達」の視点を手がかりに. 発達 166, 21-26. ミネルヴァ書房.
- ・ 鷺田清一 (2015)「聴く」ことへの力. ちくま学芸文庫, 190.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Matsui Gota	4. 巻 53
2. 論文標題 Reflection on the Professional Development of Early Childhood Education and Care Teachers in Japan Based on Children's Voices	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Early Childhood	6. 最初と最後の頁 367 ~ 384
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s13158-021-00306-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Matsumoto Hiroo, Nishiu Hiromi, Taniguchi Mina, Kataoka Motoko, Matsui Gota	4. 巻 41
2. 論文標題 Pedagogical photo documentation for play in early childhood education and care	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Early Years	6. 最初と最後の頁 1 ~ 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09575146.2021.2017407	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 松井剛太	4. 巻 42(167)
2. 論文標題 ラーニングストーリーと保育記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松井剛太・浦野陽子・川田美保・土居恭子・武田真由・國方栄美子	4. 巻 44
2. 論文標題 子どもの声をもとにした保育カンファレンスの検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 香川大学教育学部実践総合研究	6. 最初と最後の頁 25 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsui Gota	4. 巻 52
2. 論文標題 Using a Photo Projective Method to Listen to Children's Perspectives About Improving Kindergarten Environments	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Early Childhood	6. 最初と最後の頁 281 ~ 297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s13158-020-00279-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 片岡 元子 , 松井 剛太 , 松本 博雄 , 高橋 千代	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 保育者の行動変容を促す「探究型研修」の検討 : 研修をデザインする側の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 381 - 392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井剛太	4. 巻 40
2. 論文標題 子どもや保護者の声を聴く (特集 保育の質の向上を考える)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 20 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井剛太	4. 巻 94
2. 論文標題 目指すのは、保育に手応えを感じられる「自己評価」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エデュカーレ	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡今日子, 松井剛太	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 保育者集団がリフレクションにおいて本質的な諸相への気づきに至る過程 : アクションリサーチによる縦断的検討を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 271-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井剛太	4. 巻 649
2. 論文標題 多様であること、主体であること(1)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教保育	6. 最初と最後の頁 8-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井剛太	4. 巻 650
2. 論文標題 多様であること、主体であること(2)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教保育	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 松本博雄・松井剛太
2. 発表標題 幼児の声を聴きとる-「書きたくなる」を支えるために-
3. 学会等名 第74回日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松井剛太
2. 発表標題 Action Research using the Photo Projective Method to improve a kindergarten environment.
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 20th Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本博雄
2. 発表標題 「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討 IV
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松井 剛太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 新・子育て支援	

1. 著者名 松井 剛太、七木田 敦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 実践事例を通して具体的ななかかわりを学ぶ 保育現場における特別支援	



1. 著者名 中坪 史典、山下 文一、松井 剛太、伊藤 嘉余子、立花 直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 640
3. 書名 保育・幼児教育・子ども家庭福祉辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	升川 琢也(古賀琢也)  (Masukawa Takuya)  (10864689)	千葉明德短期大学・保育創造学科・講師    (42507)	
研究分担者	松本 博雄  (Matsumoto Hiroo)  (20352883)	香川大学・教育学部・教授    (16201)	
研究分担者	濱田 祥子  (Hamada Shoko)  (20638358)	比治山大学・現代文化学部・准教授    (35410)	
研究分担者	上村 眞生  (Uemura Masao)  (30530050)	西南女学院大学・保健福祉学部・准教授    (37119)	
研究分担者	水津 幸恵  (Suizu Sachie)  (30837331)	三重大学・教育学部・講師    (14101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片岡 元子 (Kataoka Motoko)  (40709242)	香川大学・教育学部・教授  (16201)	
研究分担者	中西 さやか (Nakanishi Sayaka)  (40712906)	佛教大学・社会福祉学部・准教授  (34314)	
研究分担者	岡花 祈一郎 (Okahana Kiichiro)  (50512555)	琉球大学・教育学部・准教授  (18001)	
研究分担者	大野 歩 (Ohno Ayumi)  (60610912)	山梨大学・大学院総合研究部・准教授  (13501)	
研究分担者	越中 康治 (Ectu Koji)  (70452604)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授  (11302)	
研究分担者	佐藤 智恵 (Sato Chie)  (90552232)	神戸親和女子大学・発達教育学部・教授  (34514)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------